

# 平和へのともじび

## 戦後52年

下

「どうしようもなく悲しい現実に、ただただ圧倒されるばかりでした」

スタディーツアー

倉敷市西坂の会社員山内かやさん(三)は昨年三月、内戦による混乱が続く旧ユーゴスラビア各地を訪問した。アジア医師連絡協議会(AMDA、本部岡山市椿津)が企画した「スタディーツアー」の一行として、爆風で崩れた教会、銃弾で無数の穴があいた家屋、戦火を避けて身を寄せ合うお年寄り、子供…。

難民を生み出した。

日本では風化しつつある戦争の生々しい「現実」がそこにあった。帰国後、内山さんは驚きと恐怖を率直にレポートに書き留めた。

平和に慣れきっていた

私には信じられない光景で

考えた。平和の意味を真剣に考えた。この体験を少しでも多くの人に伝えなければと

思いを新たにしました

旧ユーゴは一九九一年以降、民族共存のバランスが崩れ、内戦がぼつ発。中でもボスニア・ヘルツェゴビナは隣人、友人同士が民族の違いを理由に殺し合う事態にエスカレート、冷戦終結後の世界中に衝撃を与えた。九五年末、武力紛争は収まったが、内戦で約二十万人の死者、三百万人もの難民を生み出した。

AMDAは、NGO七団体でつくる日本緊急救援NGOグループ(JEIN)の一員として、九四年から診療所や薬局の開設など、和

平再建に協力している。

「スタディーツアー」は、

世界各地の紛争・災害地域の状況に肌で接し、自分たち何ができるかを考えて

# 悲慘さ身をもって知る

もらおうと企画。日本各地の市民や学生を現地へ派遣しており、旧ユーゴに対しては九四年から十数回、計三百人以上が参加した。

日本へのギャップ

高校生や大学生の若い世代が、ツアー参加者の大半を占める。約一週間、難民キャンプや学校、病院などを訪問し、AMDAの救援活動も視察する。参加者はテレビでは知っていても、直接目に飛び込んでくる「戦場」の悲惨さに強く心を揺さぶられるという。

「破壊された街並みや生活ぶりを目の当たりにして、参加者の顔つきが変わ

# 旧ユーゴを訪れ学習

っていく。戦争体験を

受している。だが、世界

共有することで恒久的な平和の尊さに気付くようだ。AMDA事務局の林信秀さん(三)は、ツアーの教育効果を語る。

日本が半世紀以上維持している平和のありがたさ、大切さを、世界から見詰め直してほしい。ス

「驚きよと化した街並みにしげらぐ動けなかった」

戦後五十二年。日本では平和を当たり前のように享受する。だが、世界は異なる。山陽高校 方町六条院中)の吹奏楽部が昨年十二月、ボスニア支援のためチャリティ



かつての激戦地に立つ幼稚園を慰問するAMDAスタディーツアーの参加者ら。平成8年3月、クロアチア

「グローバル化が進む中、世界平和の実現へ共通の価値観を持つことが必要。二十一世紀を担う若者が、世界のどこかで続く紛争に関心を持たしてほしい」。AMDAの菅波茂代表は期待を込めて

高まる若者の関心

みでもある。